

フランス文法における「同格」の概念

目 黒 士 門

目 次

- 第1章 ま え が き
- 第2章 問題の所在——Pignon の論旨を中心に
- 第3章 同格機能の本質
- 第4章 同格構成における主要素と従属要素
- 第5章 結 論

第1章 ま え が き

Poitiers 大学文学部 J. Pignon 教授は、*Le Français Moderne* (1961年10月) 誌上でフランス文法における「同格」(apposition) の問題を論じている。⁽¹⁾ 彼は、多くの文法家が「同格形容詞」(adjectif apposé または adjectif en apposition) を承認している事実を指摘し、それを認めない G. Galichet の説——同格機能の本質は存在を示すことにあり、従ってそれは名詞によって演じられる機能である——を批判する。そして彼は「同格機能が属詞機能のように形容詞または名詞によって無差別に営まれないのはなぜか？」という問を出す。次いで、P. Imbs の論文 *Remarques sur la fonction épithète en français*⁽²⁾ に拠って、「属詞名詞 (nom attribut) と属詞形容詞 (adjectif attribut), 同格名詞 (nom en apposition) と同格形容詞 (adjectif en apposition) が区別されるのと同じように、adjectif épithète と並んで nom épithète を認めないのはなぜか？」という第2の問を提出する。次に、第3

(1) J. PIGNON, *L'apposition* (F. M., octobre 1961, p. 257).

(2) P. IMBS, *Remarques sur la fonction épithète en français* (Mélanges de linguistique offerts à Albert Dauzat, éd. d'Artrey, 1951, pp. 146-156).

に、V. Väänänen が導入した「状況同格」(apposition circonstancielle) の概念の是非を問う。最後に、Imbs が同格の識別的特徴と見なしている述語的性格について「同格的修飾が本質的に述語的性格をもつか？」という第4の問を出す。Pignon はこの4問について読者の意見を求めた。この求めに応じ、M. Arrivé, H. Bonnard, J. C. Chevalier, G. Galichet, その他多くの言語学者・文法学者から意見が寄せられ、まれに見る盛大な誌上討議が行なわれた⁽³⁾。他方、1962年3月10日の「フランス語学会」(Société d'étude de la langue française)の会議においても同格の問題をめぐって討議が行なわれたが、上述のような問題提起において同格形容詞を承認するかに見えた Pignon は、この会議では、〈adjectif épithète〉と〈nom épithète〉、〈adjectif qualificatif détaché〉と〈nom qualificatif détaché〉の区別を提唱することによって、〈apposition〉という用語の撤廃を主張した⁽⁴⁾。

これら一連の討議によって同格の問題が解決を見たわけでないことは、事柄の性質上当然のことであろう。しかし、この討議を通じて、伝統的な同格という用語の定義不十分が明らかとなり、さらに、一見したところ用語の問題に過ぎないように見えるこの問題の背後に、統辞諸機能の分析、とくに名詞および形容詞の修飾機能の分析の問題が隠されていることが明らかになったことは、この討議の大きな成果といえよう。

私はこの小論において、まず、*F. M.* 誌上の討議に見られた2つの主要な立場、すなわち一方では Pignon, 他方では Galichet および Bonnard のそれを解説的に紹介しつつ、問題の争点を明らかにしたい。次いで、その争点を中心に、伝統的に同格と見なされている事例を私なりに分析・批判することにより同格の存在を確かめ、その定義を試みたい。Pignon が提出した問への答えは、そのプロセスにおいておのずと明らかになるであろう。

(3) 本論文の末尾の「参考文献」中、*F. M.* 関係の記事参照のこと。

(4) Pignon の報告 (*F. M.*, juillet 1962, p. 191) による。

第2章 問題の所在 —— Pignon の論旨を中心に

伝統的な文法において同格という用語は、《Le roi Louis XIV; Paris, capitale de la France; la ville de Paris》などの例が示すように一般に名詞について用いられている。同格という語によってわれわれが理解するものは同格名詞 (nom apposé または nom en apposition) である。たとえば、Grevisse は「同格とは問題となっている存在や対象の性質を付加形容詞がするように指し示すために、あるいは、この存在や対象がどのような種類に属しているかを知らせるために名詞に加わる名詞・代名詞・不定形・節である⁽⁵⁾」と述べているし、*Grammaire Larousse du 20^e Siècle* も「名詞・語群・節は、名詞・代名詞または節のそばに置かれ、……話題となっている存在やものの特殊な一面を表わす⁽⁶⁾」と述べている。つまり、同格となる語は名詞および名詞相当語——要するに広義での名詞である。I. Vildé-Lot が「最近まで、概略的に言って学校文法の伝統は同格名詞しか知らなかった⁽⁷⁾」と述べているのも、(ひとりソ連においてのみならず) 同格の概念の一般的理解の実情がそうであったことを指摘したものである。同格という呼称を一切認めず、これを撤廃せよという意見は別として、同格について語る文法書は必ず同格名詞について語っている。これは事実なのであるから承認されねばなるまい。

次に、多くの文法家は同格名詞と並んで同格形容詞を認めている。すなわち形容詞が同格機能を果すことを認めている。たとえば前掲の *Grammaire Larousse* は「あるばあいには形容詞が épithète よりも緊密でなく修飾を行なう。しかも節の動詞がその形容詞に属詞的価値を与えない。その形容詞を同格と見なすことができる⁽⁸⁾」と述べ、次のような例をあげている。

(5) M. GREVISSE, *Le Bon Usage*, Paris, Geuthner, 1959, § 212, 5°.

(6) *Grammaire Larousse du 20^e siècle*, Paris, Larousse, 1936, § 118.

(7) I. VILDE-LOT, *L'apposition dans les grammaires françaises composées par des auteurs soviétiques* (F.M., avril 1964, p. 103).

(8) *Grammaire Larousse du 20^e siècle*, § 273.

Légère et court vêtue, elle allait à grands pas. (La Fontaine.)

Les barques plates passaient, muettes, sur l'eau morte. (G. de Maupassant.)

Dictionnaire Quillet de la langue française も形容詞が同格に置かれ得ることを認めている:

L'homme, juste par nature, fut corrompu par le luxe.

A. Dauzat は「文中で形容詞は *épithète* または *attribut* となり得る……*épithète* は *virgule* にはさまれて同格に分離され得る: *Le visiteur, pâle, est reparti.*」と述べている。⁽⁹⁾

De Boer は〈*apposition de nature qualificative*〉と〈*apposition de nature substantive*〉を同一段階においている。⁽¹⁰⁾

しかし、若干の文法家は形容詞の同格機能を承認しながらも、いくばくかの躊躇を感じているようである。たとえば、W. von Wartburg と P. Zumthor は、〈*apposition*〉という用語を名詞の機能に用いているが、別の所では同格形容詞の例を指摘している:⁽¹¹⁾

Libre de mes mouvements, je ne me laisserais pas dominer ainsi.

L. Tesnière は「同格の働きは普通には名詞によって満たされるが、同様に形容詞によって満たされることもある。そのばあいの形容詞は名詞の代用である」と述べている。⁽¹²⁾

Radouant も、品質形容詞は〈*épithète*〉または〈*attribut*〉の役割しか演じないと考えているようであるが、別の箇所では〈*adjectif attribut*〉ま

(9) A. DAUZAT, *Grammaire raisonnée de la langue française*, Lyon, I.A.C., 1947, p. 111.

(10) C. DE BOER, *Syntaxe du français moderne*, 2^e éd. Leiden, 1954, §§ 36–38 et 169.

(11) W. VON WARTBURG et P. ZUMTHOR, *Précis de syntaxe du français contemporain*, 2^e éd., Berne, 1958, §§ 9–10 et 269.

(12) L. TESNIÈRE, *Éléments de syntaxe structurale*, Paris, 1959, chap. 70, § 1.

たは〈adjectif mis en apposition〉について語っている。

同様に Lanusse et Yvon は「品質形容詞は, attribut, épithète, あるいは apposition として用いられる⁽¹⁴⁾」と述べたあとで, 次の例をあげている:

Un chat, immobile, guette une souris.

そして次のようにつけ加える「これは同格として, 動詞なしで構成された属詞である。」

形容詞が同格に置かれ得ると考えている以上の諸説に対し, 形容詞の同格機能を明らかに否定するのは G. Galichet と H. Bonnard である。私はこのちに述べるように, この両者の説は伝統的な文法の教えと比較して, その首尾一貫した定義によって充分支持できると思うので多少とも詳しく両者の見解を見ておきたい。

Galichet は *Grammaire structurale du français moderne* の「序」において伝統文法の形態論的分類を批判している。「純粹に形態論的なあらゆる分類は必ずや失敗する。事実, 形態はほとんどつねに文法的には多価値であることを確認する機会をわれわれは数多くもつであろう。多くの語は品詞を変えることができる。ほとんどすべての構成は異なった機能を表現するのに役立つ⁽¹⁵⁾」と。そして Galichet は同格を引き合いに出している。「同格は本質的にある主要な語に別のある語または語群を《対置する》(poser contre) ことに存する構成の1タイプ(《ap-position》)であると長らく教えられて来た。ところが, それは同格の可能な構成の1つに過ぎない。他の構成の同格もある。たとえば, 同格は前置詞的關係の形態のもとに現われ得る。そのばあい, 同格は, あるいは主要素の外観をもち(《ce coquin de Figaro》),

(13) RADOUANT, *Grammaire française*, Paris, 1922, §§ 375 et 373. [Pignon による。]

(14) M. LANUSSE et H. YVON, *Cours complet de grammaire française*, Paris, 1938, § 214. [Pignon による。]

(15) G. GALICHET, *Grammaire structurale du français moderne*, éd. Charles-Lavauzelle, Paris-Limoges, 1967, p. 7.

あるいは従属要素の外観をもつ («*le mois de mai*»)。また、同格は等位接続詞によって導かれたり («*Mais tout dort, et l'armée, et les vents, et Neptune.*»), 従属接続詞によって導かれたりする («*La mort a ceci de bon qu'elle réconcilie les pires ennemis.*»)。ときには、同格は関係する語から非常に遠く離れて置かれる («*Les clients de l'hôtel prenaient qui du thé, qui du porto, etc.*»)。それゆえ、同格がその構成によって定義されるということ的支持するのはむづかしい。同格のすべての可能な形態を通じて同格の存在を示し、真に説得的な同格の定義を与えるためには、同格を生み出す心理的メカニズムに準拠することが必要である。」このように、同格を形態的な特性によって定義できないと考える Galichet は、次のような同格の定義を与えている。

「概略的には、同格は関係する語といわば対等関係 (*équation*) に置かれる。すなわち2語が両方とも同一の存在 (*le même être*) または同一のもの (*la même chose*) を指す。その結果、この観点から両語の間に «等符号» (*le signe égal*) を置くことができる。このようにして、«*Le roi Louis XIV*» においては、«*Louis XIV*» = *roi* であり、«*le mois de mai*» においては、«*mai*» = *mois* である。存在やものを別の仕方で指し示すことによって、同格は存在やものを特性づけ、あるいは限定するのである。そこに同格機能の第2のオリジナリティーがある。つまり同格機能の領域は、特徴表示 (*caractérisation*) の領域と限定 (*détermination*) の領域を同時に包括しているのである。⁽¹⁶⁾

つまり、Galichet によれば、同格に置かれる語は本質的に存在を示す語すなわち名詞である。かくして、Galichet は形容詞の同格機能を排斥する。「上に述べたことから、形容詞はいかなるばあいにも同格機能を演ずることはできない。なぜなら形容詞は存在それ自体を指すのではなく、存在の性格

(16) *Ibid.*, pp. 133-155.

を示すからである。それゆえ形容詞は名詞と根本的な対等関係に置かれることはあり得ない。⁽¹⁷⁾このように形容詞の同格機能を認めない Galichet は、いわゆる同格形容詞を「分離形容詞」(adjectif détaché) であると考えている。

Galichet と同じく同格機能の本質を名詞に求めるのは Bonnard である。彼は「同格が属詞名詞 (nom attribut) に対する関係は付加形容詞 (épithète) が属詞形容詞 (adjectif attribut) に対する関係と同じである」⁽¹⁸⁾と述べ、この見解を次の図式で表わしている。

$$\frac{\text{Ce poète est } Hugo \text{ (attribut)}}{\text{Le poète } Hugo \text{ (apposition)}} = \frac{\text{Ce chat est } gris \text{ (attribut)}}{\text{Le chat } gris \text{ (épithète)}}$$

Bonnard にとって、同格は本来的に名詞によって満たされる働きである。形容詞が同格機能をもち得ないのは、まさに同格の名詞的性質（より一般的な用語を Damourette et Pichon から借りるならば «substantiveuse» な性質）であり、その性質が épithète («adjectiveuse») に対する対立によって同格を定義していたのであった。⁽¹⁹⁾

私は、だれがはじめて〈adjectif en apposition〉という用語を用いたのか知らない。また、分離された形容詞が同格的に構成されているという判断がどのような根拠に基づいて行なわれたのかを確認できない。しかし、「Le lion, terreur des forêts.» «Cicéron, l'orateur romain.» のようなタイプの分離された同格名詞との構成上の類似から、同格形容詞という用語が使用され始めたのであろうことは推察できる。Galichet はこの事情をより説得的な例をあげて説明している。「分離形容詞を同格と同一視するに至らしめるのは、

(17) *Ibid.*, p. 135. なお, Galichet は *Essai de grammaire psychologique*, P.U.F., 1947, p. 120 では形容詞が同格の働きを演ずることを認めていたが, *L'adjectif peut-il exercer la fonction apposition?* (*F. M.*, juillet 1957, pp. 181-185) 以後の著作ではそれを否定している。

(18) H. BONNARD, *Grammaire française des lycées et collèges*, S.U.D.E.L., Paris, 1950, § 208; および *F. M.*, juillet 1962, p. 183.

(19) *F. M.*, juillet 1962, p. 183.

しばしば分離形容詞が同格機能をもった名詞または名詞的語群と並んで用いられるという事実である。そのばあい、文の動きは分離された諸要素のおの(20)おのに同一の機能的色彩を与えようとする。」そして彼は次の例をあげる：

« Césaire Horlaville, *un petit homme à gros ventre, souple* cependant, etc.»

同様の例を Galichet は別のところでもあげている：⁽²¹⁾

Les chiens de mer, *horribles* avec leurs têtes rondes, *monstres* qui doivent garder de leurs abois les trésors des grottes marines.

« un petit homme à gros ventre » と « souple », « horribles » と « monstres » という構成法の類似にもかかわらず Galichet は両語に無差別に〈*apposition*〉という用語を使用することを拒否している。Galichet によれば、形容詞と名詞は文法的メカニズムが異なっており、同一の機能を演ずることができないからである。Pignon は Galichet に反対し次のように述べている。「*« Cet homme est un monstre. » « Cet homme est terrible. »* という二つの文において、Galichet 氏は、*« monstre »* と *« horrible »* を無差別に属詞と見なしているように思われる。性質が名詞によって表わされようと形容詞によって表わされようと、すべての文法家はこのばあい、構成の類似は唯一の用語の使用を正当化するのに充分であるという考え方を支持している。属詞であるという判断の根拠は、属詞を導入し、属詞を要求する動詞（つまり *verbe attributif*, 換言すれば、主語または目的語の状態を表現する語たる名詞または形容詞を要求する動詞⁽²²⁾）の存在である。」Pignon が「同格機能が属詞機能のように形容詞または名詞によって無差別に営まれないのはなぜか？」という問を出したのはこのような理由によってである。

同格形容詞を認めようとする文法家はその根拠を上述の « Les chiens de

(20) G. GALICHET, *op. cit.*, p. 135, note.

(21) *F. M.*, juillet 1957, p. 183.

(22) *F. M.*, octobre 1961, p. 254.

mer, horribles ..., monstres ... » 型の構成上の類似——すなわち virgule による分離に求めているのは明らかである。他方、同格形容詞を認めない Galichet および Bonnard の基本的立場は、すでに見た通り、同格機能の本質を名詞に求めるのである。されば、Bonnard は Pignon の上の問に対し言下に答えている：「それはまさに同格の名詞的性質によるのである」⁽²³⁾と。Galichet も「同格は必然的に名詞である。なぜなら、同格は被修飾語と同じ存在、同じもの、同じ観念を示すからである」⁽²⁴⁾と繰り返している。

ここで問題の争点となっている virgule による分離の問題を検討しておく必要がある。名詞または形容詞を virgule によって分離することは同格の本質的な特徴であろうか、それとも副次的な特徴であろうか。Pignon によれば⁽²⁵⁾、Lombard は同格を次のように定義している：「多少とも副次的な説明。短い休止によって文の本体から切り離されている。その休止は、一般に書においては virgule によって示さる」⁽²⁶⁾と。Lombard にとっては、同格の本質的特徴は休止である。Pignon によれば、Ch. Bally も同様の観点に立っている。すなわち、《Cicéron orateur est supérieur à Cicéron philosophe.》という文において、Bally は《orateur》を同格と見なさない：「まん中の休止の不存在がこのケースを真の同格から区別している。《Cicéron, orateur romain》が真の同格である」⁽²⁷⁾と。では、virgule による休止はどのような意味をもっているのであろうか。われわれは本章のはじめで、Lanusse et Yvon が《Un chat, immobile, guette une souris.》の例について、「これは同格として、動詞なしで構成された属詞である」と述べているのを見た。Pignon は virgule による休止を述語的性格の関係の指標と見なす。そして

(23) F. M., juillet 1962, p. 183.

(24) F. M., juillet 1962, p. 173.

(25) F. M., octobre 1961, p. 254.

(26) A. LOMBARD, *Les membres de la proposition française*, Extr. de *Moderna Språk*, XXIII, 1929, p. 16. (Pignon による。)

(27) Ch. BALLY, *Linguistique générale et linguistique française*, 2^e éd. Berne, A. Francke, 1944, § 474.

「この述語的性格が同格を *épithète* からもっともよく区別するものである」という。そして彼は、Imbs が *épithète* と *attribut*、*épithète* と *apposition* の間にうち立てた区別を援用する（以下は、Pignon が行なった Imbs からの引用である）：

「*épithète* の機能は、文の心的・文法的構成以前に獲得され、かつ動詞によって表わされた時間からは独立な時間に対して有効な修飾を表現することにある。それゆえ、*épithète* は *attribut* および *apposition prédicative* に対立する。なぜなら、*attribut* と *apposition prédicative* は、文が考えられ構成される瞬間に獲得され、かつ主動詞が表わす時間に等しい時間に対して有効な修飾を表現する。⁽²⁸⁾」 P. Imbs は、この論文の中で上の区別の結果を検討する。代名詞は同格的修飾を受け得る。代名詞は *épithète* を伴うことができない。「定義からすれば、代名詞はすでに受けたあらゆる修飾とともに名詞の総体的意味内容を代表する。代表される名詞は、文が始まる瞬間に獲得されたこれらの修飾とともに文の中にはいるのである。そして代名詞の存在理由はすべてこの形態のもとに被代表名詞をいれることである。ところで、この完結した意味的集合体に *épithète* を加えることは、この意味的集合体に別の新たな集合体を代替させることに匹敵しよう。そのようなことは代表者 (*représentant*) の定義と矛盾するであろう。代表者にとっては絶対的な意味論的信頼性が必須条件である。代名詞が受け得る唯一の修飾は同格的修飾である。同格的修飾は、作られつつある文の1時的要求のために名詞または代名詞にもたらされる修飾である。（例：*Lui, triste comme à l'ordinaire, se tut.* これは次の意味である：*alors triste, triste au moment où il se tut*）⁽²⁹⁾ ...」

しかし、伝統的に同格語と見なされている語が必ずしも *virgule* による休

(28) P. IMBS, *Remarques sur la fonction épithète en français* (*Mélanges Dauzat*, p. 164).

(29) *Ibid.*, pp. 149-150.

止によって被修飾語から分離されているわけではないし (例: *Le roi Louis XIV, le mois de mai*), また述語的性格を呈しているわけでもない。かくして Pignon は, 伝統的に同格と見なされている構成のうちで «*Le roi soleil; Le roi Louis XIV*» のような構成が単一なアクセントをもった語群である事実からして, «*soleil, roi*» に対しては同格という名称を差し控え, «*nom épithète*» と呼ぶことを考える。また, «*Cicéron orateur est supérieur à Cicéron philosophe.*» に関して, 「実際にはここでは, 名詞が ⁽³¹⁾ *adjectif épithète* として働いている」という Bally の見解を支持する。さらに, Imbs が, «*Le roi Louis XIV*» という語群において, 名詞 «*roi*» が「もはやいかなる述語的価値ももっていない。名詞 *roi* は, 文の陳述前に獲得された修飾を表わす」と述べていることなどから, 「⁽³²⁾ 属詞名詞と属詞形容詞, 同格名詞と同格形容詞が区別されるのと同じように, *adjectif épithète* と並んで ⁽³³⁾ *nom épithète* を認めないのはなぜか?」という問を提出する。

結局, Pignon は, 次のような用語を新たに提出することによって彼の立場を明らかにしている。「*adjectifs épithètes* のそばに *noms épithètes* が識別されるであろう。 *noms épithètes* の特徴は, それが修飾する名詞のそばに置かれることと, それが修飾する名詞とともにグループを作るということである (*Le bon roi, Le roi Louis XIV, Le roi soleil, un ami crampon*)。これらのばあい以外は, *adjectif qualificatif détaché* および *nom qualificatif détaché* の用語が使用されるであろう (*Mon ami, malade, s'est fait excuser. Jean partit, orphelin en bas âge, pour la ferme de son oncle.*)。形容詞と対立的に名詞という語を使用することは, この特徴づけ (または限定) に特有なものがあることをよく示している。すなわち, 限定された名詞を別様に指し示すことによって, それを再び採り上げ «*二重化する*» (*Galichet*) 名

(30) *F. M.*, juillet 1962, p. 185.

(31) Ch. BALLY, *op. cit.*, § 474.

(32) P. IMBS, *op. cit.*, p. 161.

(33) *F. M.*, octobre 1961, p. 256.

詞によって修飾がもたらされるのである。それゆえ、同格という用語は無用であり、フランス文法から消滅しても損失はないように思われる。⁽³⁴⁾

要するに、Pignonによれば、〈épithète〉という用語は休止なしに被修飾語に結びつく形容詞と名詞に適用され、〈qualificatif détaché〉という用語は被修飾語から virgule によって分離された形容詞と名詞に適用される。この Pignon の分類と名称は純粹に形態的見地からは首尾一貫しているように思われる。しかし、Pignon 自身がいうように、果して「その明瞭さが教育的要求によく応える」ものであろうか？ とくに名詞による修飾の機能の実体を十分に認識させることができるであろうか？ これは検討を要する問題である。

私は次章において、伝統的に同格と見なされている事例について検討を施し、同格が真に妥当な概念であるかどうかを考えて見ることにするが、そのプロセスにおいて同時に、Pignonの 上述の分類方式も検討することにする。

本章のおわりに、Pignon, Galichet, Bonnard および *Grammaire Larousse* の同格に関する見解を4つの事例について表に示しておく(第1表)。

	PIGNON	GALICHET	BONNARD	<i>Grammaire Larousse</i>
Le roi Louis XIV	nom épithète	apposition	apposition	apposition
Le bon roi	adjectif épithète	adjectif épithète	adjectif épithète	adjectif épithète
Paris, capitale de la France	nom qualificatif détaché	apposition	apposition	apposition
Un chat, immobile, guette une souris.	adjectif qualificatif détaché	adjectif détaché	adjectif détaché	adjectif en apposition

(第 1 表)

〔注意〕 上図のうち、「Le roi Louis XIV」については「le roi」と「Louis XIV」のどちらが主要な語(被修飾語)でどちらが副次的な語(同格語)であるかは、文法家によって意見が異なる。この問題については第4章参照のこと。

(34) F. M., juillet 1962, pp. 191-192.

第3章 同格機能の本質

同格という一見沈腐な問題をめぐって、いろいろな説が交錯し合っていて容易に解決を見出せないことは、前章で紹介した *F. M.* 誌を中心とする論争の経過を見れば理解されるであろう。私は一つの方法として、伝統的に同格と見なされている諸例について、私なりに分析・批判を行なうことによって同格の存在を確かめ、その定義を試みたいと思う。

その前にフランス語でいう〈*apposition*〉の意味について一言しておきたい。〈*apposition*〉はラテン語〈*appositio*〉から由来しており、その動詞形〈*apposer*〉(〈*à poser*〉)は、「添える・加える」を意味する。従って〈*apposition*〉は《*action d'apposer*》(添加)である。G. Mauger が文法用語としての〈*apposition*〉の意味を《*terme placé auprès d' un autre terme*》⁽³⁵⁾としているのもこの語原的意味を指摘したものであるが、フランスの文法家たちの多くが〈*apposition*〉の定義に際して、《*placer auprès de*》という表現を使っていることは、フランスにおける同格観が語原に左右されており、その結果、同格をもっぱら形態的に見ていることを示すものといえる。ついでながら「付加形容詞」を意味する〈*épithète*〉という語も語原的意味は《*terme placé auprès d'un autre terme*》であり、〈*apposition*〉のそれとまったく同じである。ただ、〈*épithète*〉という語はギリシャ語起原であったため、一般のフランス人にはその意味がわかりにくく、そのためにかえって早くから文法用語として充足した概念を伴なって定着したようである。

ところで、伝統的なフランス文法が名詞の同格的構成の基本的なものとしてあげているのは、(1) *Le roi Louis XIV*, (2) *La ville de Paris*, (3) *Paris, capitale de la France* の3型である。ほとんどすべての文法書は、この3型

(35) G. MAUGER, *Grammaire pratique du français d'aujourd'hui*, Paris, Hachette, 1968, p. 42.

を同格名詞として説いているが、その背後にある共通的な考え方は、上に述べた〈apposition〉の語原的解釈である。すなわち、第1型《Le roi *Louis XIV*》は2名詞の直接添加であり、第2型《La ville *de Paris*》は前置詞 *de* を介した間接添加であり、第3型《Paris, *capitale de la France*》は *virgule* による分離添加である。いずれも「添加」という形態的特徴を備えている。しかし同格を定義するに当たって「添加」という形態的指標のみに拠ることは妥当であろうか？ 同格を定義づけるより本質的な特徴はないのであろうか？ ここに Galichet が行なった伝統文法批判が生ずる余地がある。私は、この3基本型の具体例を通じて、同格にとってより本質的な特徴を探ろうと思う。

(1) 第1型：Le roi *Louis XIV*.

この型の同格は純形態的には、2個の名詞の並置である。発音上は単一なアクセントをもった語群であり、「添加」という観点からは直接添加といえる。この型に属する同格として、いろいろな文法書がいろいろな例をあげている。

① 普通名詞+固有名詞

Le roi *Louis XIV* (Galichet). Le poète *Hugo* (Bonnard).

Le philosophe *Platon* (Grevisse). Le maréchal *Foch* (*Grammaire Larousse*).

② 敬称、職業上・社会上の身分の称号を表わす名詞+固有名詞

Monsieur Durand (Wartburg-Zumthor). *Capitaine* Renard (*Grammaire Larousse*). *Maitre* Corbeau (*Grammaire Larousse*). *Dame* Mouche (Grevisse). *Sultan* léopard (Grevisse).

③ 2個の普通名詞の並置

Le roi *soleil* (Grevisse, Bonnard, etc.). Le bourgeois *gentilhomme*

(*Grammaire Larousse*). Un enfant *prodige* (*Grevisse, Grammaire Larousse*). Le *pâtre* promontoire (*Grevisse*). Le gaz *hydrogène* (*Bonnard*).

一応上のようなグループに分けてみたが、これを見ても、一般に文法書がアランダムに列挙している諸例が形態的には2個の名詞の並置であっても、よく吟味してみるとはなはだ異質なものを含んでいることがわかる。

第1群 «Le roi *Louis XIV*, Le philosophe *Platon*, etc» の構成の特徴は、並置された2個の名詞の間に意味上の等価関係が認められることである。すなわち、«le roi=*Louis XIV*, le philosophe=*Platon*» である。実際、これらの語群が文中にはいると、名詞 «le roi» は唯一の特定の個人を指し、«*Louis XIV*» と同じ意味的拡張をもつ。「le philosophe」と «*Platon*» の関係も同じである。Galichet が「同格は被修飾名詞と同じ存在、同じもの、同じ観念を指す」と述べているのはこのグループの構成を真の同格と見なしているからである。

第2群 «*Monsieur Durand*; *Capitaine Renard*, etc.» の構成も、並置された2個の名詞の間に等価関係が認められないことはないが、その関係は第1群のばあいと比較するときわめて弱い。Mme Bogomolova⁽³⁶⁾ は、職業上の称号、敬称、社会的身分の称号を表わす名詞を同格と見なしているが、その同格は非常に弱いので、これらの構成の中にはほとんど複合名詞を見ることができ、そして、2つの要素のうちのどちらが他の要素に添加されているかを知るのにしばしば躊躇が感じられると述べている。事実、これらの構成における第1名詞をたんなるレッテル (*étiquette*) と感ずるのがわれわれの心理的現実ではなからうか?

第3群の構成は2個の普通名詞の並置であるが、上に指摘した例を順に検

(36) I. VILDE-LOT, *op. cit.*, (*F. M.*, avril 1964, p.106).

討しよう。《Le roi soleil》がルイ14世の異名であることはいうまでもないが、この構成の2要素は等価関係にはない。Galichetは当然、《soleil》を同格とは見なさない。《La Ville Lumière》、《le Roi Soleil》について彼は「《Lumière》と《Soleil》は appositions ではなく、épithètes である。事実、この両語は、主要な語と対等関係におかれることはできない⁽³⁷⁾」と述べている。このGalichetの見解は支持され得る。たとえば、Le roi Louis XIVとの相違は明白である。Le roi soleil (太陽王)はそれ自体完結した複合語であり、この表現から soleil を取り去れば意味をなさないのである。このことは、《le bourgeois gentilhomme》、《un enfant prodige》にも通用する。前者は、モリエールの喜劇の名前であり、後者は「神童」という一つのまとまった観念を表わす複合語である。Grammaire Larousse は、un enfant prodige, le bourgeois gentilhomme に同格的構成を認めつつも、次のようにつけ加えている：「V. Hugo が style poétique で大いに拡張しようとしたこの構成 (nos doux chevaux mensonges, le pâtre promontoire) はフランス語ではほとんど使用されていない。今日、フランス語の日常語や商業語において使用されているこの構成の例 (foire-exposition, bateau-lavoir) は正真正銘の複合名詞である。あるいはまた、分析が示すところによれば、2つの名詞の間には同格よりもむしろ補語の関係が見出される⁽³⁸⁾」と。同じくPignonもまた《le pâtre promontoire, le bâton-paysan, le glaive-roi, etc》を本物の複合名詞と見なしている⁽³⁹⁾。このように見ると、第3群に属する構成は大部分、複合名詞であり、われわれはこのような構成を自由に作り出すことはできない。

第1型《Le roi Louis XIV》型の同格は、2個の名詞の直接的な並置とはいえ、上の3群の差を見れば、きわめて異質な要素を含んでいることがわ

(37) G. GALICHET, *op. cit.*, p. 136, note (1).

(38) Grammaire Larousse, § 212.

(39) F. M., octobre 1961, p. 256.

かる。これらの多様な事例に、一括して同格の名称を与えることは妥当ではない。それゆえ、私は Galichet のように同格関係を「2個の要素の間に対等関係 (équation) が認められるばあいに限る」のは妥当であると思う。

ところで、すでに前章で見た通り、Pignonは、《Le roi Louis XIV》型の構成における roi を nom épithète としている。Pignon によれば分離なしの名詞はすべて nom épithète であるが、それでは、たとえば《Le roi Louis XIV》と《Le roi soleil》の両方とも nom épithète となり、両者の違いを示すことはできない点で、伝統文法における〈nom apposition〉という用語のあいまいさと変わらない。私は nom épithète という用語を認めるのにやぶさかでない。しかし、nom épithète という用語は、Galichet が指摘した《Le Roi Soleil》《La ville Lumière》のような例や、《L'instinct tortue dépasse la science lièvre.》(Alain)、《Cicéron orateur est supérieur à Cicéron philosophe.》のような例に見られる名詞である。

(2) 第2型 : La ville de Paris.

この型の同格は2個の名詞が前置詞 de によって結合された間接添加であるが、「このばあいの de が統辞論的虚辞または無意味な前置詞である」⁽⁴⁰⁾ことは大部分の文法家が認めている。この型に属する同格として文法書があげているものには次のようなものがある。

La ville de Paris. (Mauger, Grevisse, Bonnard, etc.)

Le mois de mai. (Mauger, Grevisse, Bonnard, etc.)

Les monts des Pyrénées. (Mauger)

Le fleuve du Pô. (Mauger)

Le titre de roi. (Grevisse)

La tragédie d'Horace. (Grevisse)

(40) M. GREVISSE, *op. cit.*, § 212, 5°.

Le mot d'*ingénieur* est assurément un beau mot. (Grevisse)

これらの構成は、第1型《Le roi Louis XIV》のばあいと同じように、2個の名詞は同一の存在、同一の事物を指している。すなわち、《La ville de Paris》、《Le mois de mai》において、それぞれ、la ville=Paris, le mois=mai の対等関係が認められる。それゆえ、この構成が真の同格である。Grammaire Larousse は、この種の同格と名詞の補語 (complément de nom) を混同しないように注意して「同格においては、2つの名詞は同じもの・同じ存在を表わす。名詞の補語のばあいには、2つの名詞は、異なった2つの存在・2つの対象を指す⁽⁴¹⁾」と述べ、次の例をあげている：

le mois de décembre (同格)

le premier mois du printemps (名詞の補語)

Galichet も、《La ville de Paris.》(同格) と 《les rues de Paris》(限定補語) を区別しなければならないことを指摘している。⁽⁴²⁾

以上に述べた《La ville de Paris》型の同格構成は、Galichet によれば従属要素の外観をもつ同格である。これとは逆に《le coquin de Figaro》のような主要素の外観をもつ同格構成がある。⁽⁴³⁾

un maladroit de chauffeur, la sottise de fille, une drôle d'idée, ce voleur de commerçant, ce menteur de Marcel, un amour d'enfant, un brave homme de pompier, un saint homme de chat (La Fontaine), cet idiot de Jean, Ce cochon de Morin (de Maupassant).

この型の構成も2個の名詞の間に等価関係が認められるから真の同格といえよう。

(3) 第3型：Paris, capitale de la France.

(41) Grammaire Larousse, § 118, p. 72.

(42) G. GALICHET, *op. cit.*, p. 134, note (1).

(43) ここに列挙した例は、G. MAUGER, *op. cit.*, § 106 による。

この型の同格は2個の名詞の間に休止があり、書の形態のもとではその休止が *virgule* による分離で示される。それゆえ、これは分離添加である。ところで、この型の構成を特徴づける *virgule* による分離——発音上は休止——を同格の本質的な指標とする意見 (Lombard, Bally, etc.) が支持され得ないことは、すでに前章で見た通り、《*Le roi Louis XIV*》, 《*la ville de Paris*》型の同格の存在を見れば明らかであろう。しかし、*virgule* による分離の価値を全面的に否定することは正しいであろうか？ これは一考を要する問題である。伝統的な文法書は、同格語を *virgule* によって分離することの統辞上、文体上、意味上の価値にあまり言及していないようである。

Virgule には大別して2つの働きがある。第1はたんなる休止を示すことであり、第2は文中のある要素を浮き彫りにすることである。分離された同格は、*virgule* のこのような働きを利用した修飾機能である。私は、分離された同格には次のようなさまざまな価値を認めることができると思う。

1° 同格が語群（名詞句や名詞節）のばあいにはそれを明示する。

Travailler, grand devoir, est aussi une joie.

Il y a une chose qui est fâcheuse dans votre cour, que tout le monde y prenne liberté de parler. (Molière)

2° 分離によって、同格語は冠詞を自由に使用でき、それによって浮き彫りの程度を変えることができる。

無冠詞のばあいは、たんなる性質表示である：

Paris, capitale de la France.

Lazare, homme de bien, mourut à Béthanie.

不定冠詞は、同格によって示された存在を同種の存在の中からとくに浮き彫りにする：

François Mamaï, un vieux joueur de fifre. (A. Daudet)

J'ai consulté le docteur Leblanc, un oculiste de l'hôpital. (Mauger)

定冠詞は存在がよく知られていることを強調する：

Martin, *le nouveau directeur*, est arrivé hier. (Wartburg-Zumthor)

Corneille, *l'auteur du Cid*.

指示代名詞が用いられて浮き彫りを一層強調することもある：

Le canard, *ce porc de la gent volatile*, se goberge hideusement dans la mare. (V. Hugo)

3° 分離された同格は比較的自由な位置を占めることができる：

Colbert, *ministre de Louis XIV*, a déployé une grande activité. または, *Ministre de Louis XIV*, Colbert a déployé ...

Agent, il ne vient pas. または, Lui, *agent*, ne vient pas. または, Il ne vient pas, *agent*.

4° 同格が名詞以外の名詞相当語のばあいにそれを明示する。

L'ainé, *celui-ci* a douze ans. (Bonnard)

La voiture grise, *la mienne*, a été endommagée. (Mauger)

Je ne désire qu'une chose, *réussir*. (Bonnard)

Je ne désire qu'une chose, *que vous soyez heureux*. (Bonnard)

5° 分離同格は、原因・対立・仮定などを表わすことができる。すなわち述語的性格をもつことができる。

M. Legris, *médecin*, est tenu de porter secours (= *parce qu' il est médecin*). (Mauger)

M. Legris, *pourtant médecin*, a refusé ses secours (= *quoiqu'il soit médecin*). (Mauger)

Pierre, *médecin*, aurait le droit d'intervenir. Simple étudiant, il ne le peut pas (= *s' il était médecin ...*). (Mauger)

私は以上に指摘したような点に、分離同格の統辞上・文体上・意味上の特別の価値が認められると思う。virguleによる分離は同格にとって本質的なことではない。しかし、「Le roi Louis XIV」、《la ville de Paris》のような型の同格が多少とも成句的で型にはまった印象を与えるに対し、分離同格

はきわめて豊かな肉づけを文に与える可能性をもっている。事実、われわれが自由に作り出すことができる同格はこの分離同格である。分離同格の中にわれわれは同格のもっともダイナミックな姿を見るのである。

さて、ここでもう1度 Pignon の提起した名称に戻ろう。Pignon が〈adjectif qualificatif détaché〉に対して〈nom qualificatif détaché〉と呼んでいるのは、いま上に見たばかりの分離された同格のことである。私は、Pignon のこの新しい名称が必ずしも事実を正確に把握しているとは思わない。なぜなら、たとえば「*Martin, le nouveau directeur, est arrivé.*」において、「*le nouveau directeur*」が「*Martin*」に対する関係はたんなる分離名詞による性質表示ではなく、両語の間には明らかに意味上の等価関係が認められるのである。すなわち、この文脈では「*Martin*」と「*le nouveau directeur*」は同一の意味的拡張をもっている。そして、同格という事象が2語の間に等価関係をうち立てる機能であることをわれわれはすでに確認し得たと思う。それゆえ、「*le nouveau directeur*」を同格と呼ぶのがよいと思う。

第4章 同格構成における主要素と従属要素

本章では、同格構成における2個の名詞のうち、どちらの語が同格語なのかを考えてみたい。たとえば「*Le roi Louis XIV*」において、同格語は「*le roi*」であろうか、それとも「*Louis XIV*」であろうか？

多くの文法家は同格構成における2個の名詞のうち、一方が主要素（被修飾語）であり、他方が副次的要素（修飾語）すなわち同格語であると考えている。それゆえ、同格語がどれであるかを決定するためには、どちらの語が主要素（被修飾語）でどちらの語が副次的要素（修飾語）であるかを決定しなければならない。

この問題について Bonnard は次のように述べている。「Pignon 氏は「*le roi Louis XIV*」において、同格は名詞 *roi* であることを承認された事実と

しておられる。これは、同格は関係する名詞よりもせまい拡張をもつことはできないという原理——この原理は属詞にも通用する——を利用したきわめて流布した意見である。私は同格を定義する同質原理のこの必然的帰結を疑わない。しかし名詞 *le roi* は唯一の個人を指しており、*Louis XIV* と同じ拡張をもっていることに注目しよう。《*le grand Louis XIV*》との比較によってだまされてはならない。《*le grand Louis XIV*》においては、冠詞 *le* は名詞 *Louis XIV* に関係し、この2語が *épithète* を取り囲んでいる。同格的表現においては、冠詞は第1名詞に⁽⁴⁴⁾関係する」と。そして彼は、次の2例：

《*La vedette Charlie Chaplin a été reconnue.*》

《*Le fleuve de la Loire est lent.*》

を指摘し、「この2文において行なわれている一致は、主語が第1名詞 (*la vedette, le fleuve*) であることをよく示しており、それゆえ第2名詞は同格である」と述べている。Bonnard にとっては、《*le roi Louis XIV*》、《*la ville de Paris*》において、同格語はそれぞれ *Louis XIV* と *Paris* である。彼は次の諸例において、イタリック体の語を同格として⁽⁴⁵⁾いる：

Le poète Hugo. Le Roi Soleil.

La ville de Paris. Le mois de mai.

Ce vieux caïman de père Grandet. (Balzac.)

Galichet も主要素と副次的要素を区別し、次のように述べている。「われわれは《*terme principal*》という。なぜなら同格は関係する2語の間に意味上の対等関係をうち立てるとはいえ、この関係はあらゆる統辞関係と同じように、心理的には階級的な関係である。同格は第1の語を明確にするために修飾または限定をもたらすという事実によって、第1の語に従属する。しかしながら、2語の間に心理的均衡がとれていて、どちらの語が主要でどち

(44) *F. M.*, juillet 1962, pp. 185–186.

(45) *H. BONNARD, op. cit.*, p. 164.

らの語が従属的なのが問題になるようなばあいが生ずる：

« Le roi Louis XIV était très orgueilleux. »

同格語はどれであろうか？ « roi » であろうか？ « Louis XIV » であろうか？ これは論議の余地がある⁽⁴⁶⁾」と。Galichet はこのように判断を差し控えているが、他の箇所での記述によると、le roi が主要素で、Louis XIV を同格と見なしている⁽⁴⁷⁾。

前置詞的補語の形態をもった同格について、Galichet が « La ville de Paris. » と « Ce coquin de Figaro. » の2種を区別していることはすでに述べたが、このうち « La ville de Paris. » については、「実際、動詞と属詞を支配するのは第1名詞であると考えることができる： Ex. « La ville de Paris est connue du monde entier. »⁽⁴⁸⁾」という理由によって、第2の語 Paris を同格と見なしている。もう一方の同格 « Ce coquin de Figaro. » については「第1の語が他の語を修飾しており、それゆえ同格を構成していることは明らかである⁽⁴⁸⁾」と述べ、類似のケースとして次の例を指摘する：

« Votre panier percé de gendre. »

« Ce souillon de femme est la plus négligente qui soit. »

次に Grevisse の見解を見ておこう。彼は、« la ville de Paris », « le mois de mai » について、「ある文法家たちにとっては同格は de によって導かれる名詞であり、別の文法家たちにとっては同格は第1名詞である。すくなくとも Paris と mai が主要な語であることを認めるならば、ville と mois は種類を示す補助語に過ぎないから、あとの意見 (ville と mois が同格であるとする意見) がもっとも是認さるべきである⁽⁴⁹⁾」と述べている。Grevisse は、同格は関係する名詞よりもせまい拡張をもつことはできないという見解に立っているようである。事実、彼は « le philosophe Platon » においても

(46) G. GALICHET, *op. cit.*, pp. 135-136.

(47) *Ibid.*, p. 134.

(48) *Ibid.*, p. 136.

(49) M. GREVISSE, *op. cit.*, p. 153.

philosophe を同格と見なしている。

同格的構成と考えられている5つの例について、文法家たちがどの語を同格としているのかを表に示しておこう(第2表)。

	GALICHET	BONNARD	GREVISSE	(PIGNON)
Le roi Louis XIV.	Louis XIV	Louis XIV	roi	(roi)
Paris, capitale de la France.	capitale	capitale	capitale	(capitale)
La ville de Paris.	Paris	Paris	ville	(Paris)
Ce coquin de Figaro	coquin	Figaro	coquin	(Figaro)
Le Roi Soleil	—	Soleil	Soleil	(Soleil)

(第2表)

- 〔注意〕 (1) 同格を認めない Pignon については修飾語をカッコ内に示した。
 (2) Galichet は《le Roi Soleil》を同格的構成と認めない。

上表のように文法家によって同格語が異なるのはなぜか? 個々の文法家の解釈の相違によることはすでに見たが, そのような解釈の相違を生み出すところに同格という事象の性質が隠されている。上表において, 文法家たちが一致して同格と見なしているのは《Paris, capitale de la France》における《capitale》である。virgule によって分離された同格構成においては, その分離の事実によって同格語が文の本体から切り離され, 浮き彫りにされ, 同格に置かれている語が明瞭に示される。他方, 《Le roi Louis XIV》, 《La ville de Paris》のばあいには主要素(被修飾語)と従属要素(修飾語)の区別が明らかでない。2個の名詞の結合が緊密なため, どちらが主要素でどちらが従属要素であるかを決めるのにしばしば困難を感じる。そこで Bonnard と Galichet は形態的一致を判断の根拠とし, 動詞と属詞を支配する語が主要素で, もう一方の語が副次的要素すなわち同格語であると考えている。しかし, 私は形態的一致と統辞論的機能がつねに合致するかどうかは疑問であると思う(この問題については, また稿を改めるつもりである)。

結局、同格は2個の名詞の間に意味上の等価関係をうち立てる機能であるが、その関係がつねに「イェラルシックな関係」(Galichet)であるとは断定できない。2語の間の意味上の価値関係は、実際には、その程度がさまざまであり、あるばあいには、主要素と従属要素の区別が許されないほどに対等な関係であり(Ex.: «Le roi Louis XIV»), またあるばあいには、同格語がほとんど形容詞的色彩を帯びるほどにまで修飾語(従属要素)の性格をもつのである(Ex.: «M. Lefèvre, *transporteur*, habite place Victor-Hugo.»)。この前者のばあい2語の関係はまったく相互的である。たとえば«La ville de Paris»においては、「la ville」は«Paris»に対し同格であり、「Paris」は«la ville»に対し同格である。そしてこの同格に修飾機能を認めるならば、その修飾機能もまた相互的なのであって、2個の名詞のうち一方が他方をつねに固定的に修飾しているわけではない。私は、「同格」という事象の本来の姿はこのようなところにあると思う。こう見て来ると、日本語の「同格」という用語は事実を適確に表現した用語であるように思われるのに対し、たんなる「添加」を意味するフランス語の〈*apposition*〉という語は、文法用語としては充分でない。Pignonのように〈*apposition*〉を〈*épithète*〉に置き換えても奏功しないように思われる。〈*épithète*〉も結局は「添加」の意味しかもたないからである。

第5章 結 論

最後に、以上の小論で断片的に述べてきた私の判断を要約して結論としたい。

第1。同格に関する Galichet の見解はその大綱において首尾一貫しており、十分に首肯されると思う。すなわち同格は本質的に名詞によって満たされる機能である。同格は関係する語と意味上の等価関係をうち立てることによって、存在やものを別様に指し示す修飾・限定の機能である。

第2。従って、同格という用語は心理的な機能を指しているのであって、

形態に対して与えられた名称ではない。しかしながら、同格をその具体的事例について形態的に分類することは、もちろん可能であり、その基本型として3つの型が認められる。第1型は、2個の名詞の直接的な並置であり («le roi Louis XIV»), 第2型は、関係語(前置詞, 接続詞, 関係代名詞)を介した間接的結合であり («la ville de Paris»), 第3型は、virguleによる分離である («Louis IX, un roi glorieux»). しかし、逆にこれらの形態から同格を定義づけることはできない。

第3。おのずと Pignon の間に対する答えが生まれる。同格的修飾の本質は述語的性格ではない。述語的性格は、分離同格のうち時に現われる1つの特徴に過ぎない。また、同格形容詞、状況同格について語ることも正しくない。いずれも、同格の可能な形態的特徴の一つに共通性を求めたに過ぎないからである。ただし、分離形容詞を同格形容詞と呼ぶことは、今日ではかなり一般化しているから、分離された形容詞がどのような働きをもっているかを充分理解していれば、この用語をあえて排斥する必要もない。

第4。〈nom épithète〉は承認される。ただし、〈nom épithète〉とは名詞が付加形容詞的に用いられるばあい («le café nature», «un regard bon enfant», «le Roi Soleil») をいうのであり、2個の名詞の間に意味上の等価関係が認められる同格とは区別される。従って、Pignon が提案した新しい用語を認めるには問題が残されているように思われる。われわれが同格と呼ぶものを Pignon は〈nom épithète〉と〈nom qualificatif détaché〉に分けているのであるから。

第5。第1に述べたように、Galichet は同格が2名詞の間に意味上の等価関係をうち立てる関係と考えているが、にもかかわらず彼は、同格が心理的にはつねにイエラルシクな関係であるといい、主要素と従属要素を区別する。しかし、私は、2名詞の間の等価関係が完全であれば主要素と従属要素の区別が消滅し、そのようなばあいこそ真に同格の名に値する同格について語るができると思う。

第6。そのような同格の性格を日本語の「同格」という用語は充分に言い表わしていると私は思う。それに反し、たんなる「添加」を意味するフランス語の〈*apposition*〉という語は文法用語として充分でない。しかし、用語というものは多少とも伝統的・習慣的なものであるから、〈*apposition*〉という用語を用いても差し支えない。問題はこの用語に充分な定義を与えることである。小論はその目的のために書かれたものであるが、はたして「同格」(*apposition*)を充分に定義し得たであろうか？ 読者諸賢のご判断にまっつ。(完)

参 考 文 献

A. 単行本 (著者名ABC順) :

1. BALLY (Ch.), *Linguistique générale et linguistique française*, 3^e éd. Berne, 1950.
2. BOER (C. DE), *Syntaxe du français moderne*, 2^e éd. Leiden, 1954.
3. BONNARD (H.), *Grammaire française des lycées et collèges*, 6^e éd. Paris, 1950.
4. BRUNOT (F.), *La Pensée et la Langue*, 2^e éd. Paris, 1926.
5. DAUZAT (A.), *Grammaire raisonnée de la langue française*, Lyon, 1947.
6. GALICHET (G.), *Essai de grammaire psychologique*, Paris, 1947.
7. GALICHET (G.), *Grammaire structurale du français moderne*, Paris-Limoges, 1967.
8. *Grammaire Larousse du 20^e siècle*, Paris, 1936.
9. GREVISSE (M.), *Le Bon Usage*, 7^e éd. Gembloux-Paris, 1959.
10. IMBS (P.), *Remarques sur la fonction épithète en français (Mélanges de linguistique offerts à Albert Dauzat*, Paris, 1951, pp.146-156).
11. MAROUZEAU (J.), *Lexique de la terminologie linguistique*, 3^e éd. Paris, 1951.
12. MAUGER (G.), *Grammaire pratique du français d'aujourd'hui*, Paris, 1968.
13. TESNIERE (L.), *Eléments de syntaxe structurale*, Paris, 1959.
14. WARTBURG (W. VON) et ZUMTHOR (P.), *Précis de français contemporain*, 2^e éd. Berne, 1947.

B. 雜誌 (発行順):

1. GALICHET (G.), *L'adjectif peut-il exercer la fonction apposition?* (F. M., juillet 1957, pp. 181-185).
2. PIGNON (J.), *L'apposition* (F. M., octobre 1961, pp. 252-257).
3. GALICHET (G.), *Qu'est-ce que l'apposition?* (*Le Français dans le monde*, N° 7, février-mars 1962, pp. 39-40).
4. MOUCHET (J.-P.), PIGNON (J.), CHAURAND (J.), CHEVALLIER (A.), ARRIVE (M.), BONNARD (H.), CHEVALIER (J.-C.), *Discussion: l'Apposition* (F. M., juillet 1962, pp. 172-192).
5. BONDY (L.), *Discussion: l'Apposition* (suite) (F. M., janvier 1963, pp. 50-54).
6. BOUET, TILLY (Ch.), *L'apposition* (F. M., octobre 1963, pp. 283-291).
7. VILDE-LOT (I.), *L'apposition dans les grammaires françaises composées par des auteurs soviétiques* (F. M., avril 1964, pp. 101-110).